



## 合唱の魅力、芸術の力（ちから）

秋の夜長。自分の部屋の書棚から何気なく一冊の本を手に取りました。  
すると、以下のような文章が目飛び込んできました。  
皆さんはこの本の題名がわかりますか。このような内容です・・・。



（第44回生徒会スローガン↑）

『「埴生（はにゅう）の宿（やど）」も「庭の千草（ちぐさ）」も、日本人はこれがむかしの日本の歌だと思っていますが、もともとはイギリスの古い歌の節なのです。ことに「埴生の宿」はイギリス人が自慢をするかれらの家庭の楽しみをうたったもので、すべてのイギリス人は、これをきくと、自分たちの幼かった頃のこと、母親のこと、故郷のことを思うのです。それが、こんなビルマの山の中で、危険きわまりないと思っていた敵を包囲していたときに、その敵がしきりにうたっているのをきいたのですから、何ともいえない異様な感動をうけたのです。こうなるともう敵も味方もありませんでした。戦闘ははじまりませんでした。イギリス人とわれわれとは、いつのまにか一しょになって合唱しました。両方から兵隊が出て行って、手を握りました。ついには、広場の中央に火をたいて、それをかこんで、われらの隊長の指揮で一しょにこれらの歌をうたいました。（中略）終戦を迎えながら、それを知らずに敗走する日本軍の一隊（以下、省略）。』（注意：原文に忠実に表記しています。）

これは、竹山道雄さんの小説「ビルマの豎琴」の一節です。太平洋戦争のさなかにビルマ戦線（現在のミャンマー）に送られた一兵士が、終戦後、日本に帰らず、僧となり、同胞の遺骨を弔（とむら）って生きることを決意するという小説です。その中に終戦を迎えながらも、それを知らずに敗走する日本軍の一隊が、イギリス軍に包囲される場面があります。この隊は、音楽学校を卒業した隊長の影響で、戦火の中でもよく合唱をしました。イギリス軍に包囲された時も合唱の最中（さいちゅう）でした。近くには爆薬を積んだ荷車があり、もし戦闘が始まりその爆薬が銃火を浴びれば日本軍は全滅してしまう。まず、その荷車を移動させなければならない。日本兵は、イギリス軍の包囲を知らぬかのように、皆で楽しげに「庭の千草」と「埴生の宿」を歌いながら、荷車を安全な場所へ運びました。荷車を運び合唱が終わって日本兵が突撃に入ろうとすると、今度は周囲から「埴生の宿」の調べが聞こえてきたのです。イギリス兵が歌っていた。歌は英語であったが、曲は同じでした。さらに「庭の千草」の調べが響きました。「埴生の宿」も「庭の千草」も、イギリスで古くから愛唱されていた歌に、日本語の歌詞をつけたものです。イギリス兵にとっては、なじみ深い曲でした。敵も味方もなく、両軍の兵士たちは、声を合わせて歌いました。戦闘ははじまりませんでした。互いに兵士が出て来て手を握り合いました。日本兵は、そこで三日前に戦争が終わったことを知ったのです。歌が人間の心と心をつなぎ、無駄な血を流さずにすんだのです。

この小説の時代背景と現代とは全く異なりますが、ビルマの豎琴を読むたびに「歌声が持つ魅力」を感じます。いよいよ文化祭まで3日となりました。クラス、学年、部が気持ちを一つにして「心を動かす」歌声や展示にしてほしいと思います。文化祭を通して、集団の絆がさらに深まることを期待しています。

※ 参考図書・・・竹山道雄著「ビルマの豎琴」新潮文庫より一部抜粋。